

武蔵野日曜集会

神の義

——ロマ書第3章21～31節——

1996年3月24日(武蔵野)

小池辰雄

救を与える義 聖意体现 キリスト化 受けとる 行為そのものが言葉 魂の教育 よくやつてきたな 信じていません 渾然として 神主主義 讃美歌的存在 聖霊を与えんがための贖罪 キリストを受けとる 天的必然性 耶蘇教なんか キリストの義を与える 自分と別れを告げる

【ロマ書3・21～31】

21 然るに今や律法の外に神の義は顕れたり、これ律法と預言者との由りて証せられ、²² イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信ずる者に与えたもう神の義なり。之には何等の差別あることなし。²³ 凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、²⁴ 功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり。²⁵ 即ち神は忍耐をもて過ぎ来しかたの罪を見遁し給いしが、己の義を顕さんとて、キリストを立て、その血によりて信仰によれる宥の供物となし給えり。²⁶ これ今おのれの義を顕して、自ら義たらん為、またイエスを信ずる者を義とし給わん為なり。²⁷ 然らば誇るところ何処にあるか、既に除かれたり、何の律法に由りてか、行為の律法か、然らず、信仰の律法に由りてなり。²⁸ 我らは思う、人の義とせらるるは、律法の行為によらず、信仰に由るなり。²⁹ 神はただユダヤ人のみの神なるか、また異邦人の神ならずや、然り、また異邦人の神なり。³⁰ 神は唯一にして割礼ある者を信仰によりて義とし、割礼なき者をも信仰によりて義とし給えばなり。³¹ 然らば我ら信仰をもて律法を空しくするか、決して然らず、反つて律法を堅うするなり。

●救を与える義

ローマ書というのは新約聖書の、或る意味においては中心ですね。まあ福音書は別ですけど。パウロがローマに行く前に、これをコリントで書いた。彼は世界の都であるローマにどうしても福音を伝えなければならぬと、それから更にイスパニアの方まで行くうと思っただんですが、ローマで殉教の死を遂げたらしい。ネロという悪い皇帝がいました



から。そういう歴史的な、パウロの生命懸けの書翰です。これは何回読んでも素晴らしい。

21 然るに今や律法の外おきて ほかに神の義は顕れたり、これ律法と預言者おきてとに由りて証せられ、²²イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信する者に与えたもう神の義なり。之には何等の差別あることなし。

「義」という言葉はイスラエル人が非常に好きな言葉です。旧約聖書にもこの義という言葉がよく出てくる。義は非常に力強い内容ですから、義に背くものは裁かれる。「愛」と「義」とありますけれども、義のない愛はダメなんで、義と愛とは離すことができない。聖書の愛は正に義を脊椎骨としているところの愛ですから。普通言われている愛よりも次元的にもっと深く、また高いものです。この義はラテン語では *justitia saluifera* (ユスティティア・サル・ティフェーラ) という。これは「救を与える義」という意味です。福音の義は、救を与える義であって、「審く義」ではない。

「然るに今や律法の外ほかに神の義は顕れたり」

とはそのことです。与える義なのであって、審く義ではない。

人間の魂の在り方の脊椎骨は義なんです。そういう意味において、どうも、今の日本をみていると、情けない。我々が若いときは、シナの孔子の道徳を非常に教えられ、また吹き込まれた。しかし、「正義」という言葉はあったけれども、やはり「義」という単純な言葉はなかった。義という言葉は聖書的な言葉です。これは単なる正義ではない。

●聖意体现

「律法」とはモーセの十誡を中心とした律法です。そういった旧約の律法の他に神の義があらわれたという。これだけ見ていると何のことかわからない。

「義人なし、一人だになし」

とパウロが言いました。ところが、例外者が一人いた。それはキリストなんです。神様の聖意みこころを行ずることを義という。神様の聖意そのものが義なんです。キリストはこの神の聖意を体现された。身体でもって存在で現した。「聖意体现」という言葉を私は使いましたが、まさにこの聖意体现が本当の「義人」なんです。

旧約聖書にはイザヤ書に「義」という言葉があるが、アモス書からずっと、預言書にはよく義という言葉が出てくる。

「公道おおよけを水のごとくに正義ただしきをつぎざる河のごとくに流れしめよ。」(アモス5・

24)

という有名な言葉がある。この「正義」は義なんです。正義という訳はあまりよくない。義でいい。神のみこころが即ち義なので、いわゆる正義ばかりではない。神のみこころが義なんです。だから、神の聖意を現するひとが義人なんです。そういう義人はキリストの他にはいない。「義人なし一人だになし」とパウロが言ったのはそういうことです。



●キリスト化

「信仰によって義とされる」

という言葉がまた出てくる。これはマルチン・ルターが非常に好きな言葉です。それで今度は、「信仰、信仰」とえらく言われるようになってしまふ。私は、「しんこう」は「信じ仰ぐ」(信仰)ではなく、神と交わる「神交」と書く。霊的なキリストとの交わりです。キリストの中に自分を投げ入れると、我々はキリスト化される。クリスチャンというのは、キリスト化されていなければ、クリスチャンなんて言えない。「キリストを信ずる」なんていうのはだめなんです、現実にはキリスト化されているということではない。キリストは、

「我を見し者は父を見しなり」

と言われた。キリストは父化ちちかされているひとだから。

「私を見た者は神様を見たのだ。私は神様の現象体だ」

と。我々はキリストの現象体でない限り、クリスチャンなんて言えないんだ、ただ「キリストを信ずる」なんていうのでは。キリスト体現者です。もちろん、我々は完全には出来ません。しかし、質的には、そういう現実を一番根底にもたなければ、キリスト者ではないわけです。

●受けとる

²¹然るに今や律法おきての外ほかに神の義は顕れたり、これ律法と預言者よめいとに由りて証せられ、²²イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信ずる者に与えたもう神の義なり。之には何等の差別あることなし。

モーセの律法の他に神の義がキリストにおいて現れた。イエス・キリストを「信ずる」ではなく、受けとるです。

「イエス・キリストを受けとることによつて、受けとる者に与え給う神の義である」ということ。「分かる、分からない」ではない。「与える」から、これを受けとる。

私はこういうのは、新しい訳をつくりたいくらいに思う。パウロの言葉のギリシヤ語に文字通りに訳すと、かえつてパウロの気持ちを本当は伝えなくなってしまうから、パウロの気持ちを内側から受けとつて、そういう日本語で訳したほうが本当はいい。

「分からせる」のではなくて、「与える神の義である」ということです。

●行為そのものが言葉

²³凡てすべの人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、

「凡ての人、罪を犯したれば」というよりも、「凡ての人は罪びとであるから」と言つた方がいい。「罪びとである」ということはエゴイストということ、自己中心で生きていることです。



日本人はこの頃は自己意識が強い。自分勝手だね、「自分さえよければいい」というような。思い遣りがなくなってしまう。思い遣りというのは漢文では「恕^{じよ}」という。思い遣りというのはいいい言葉だ。しかも、それはただ思うのではなくて、行動でもって現さなくては。

「初めに言葉あり」

ではないんだ、

「初めに行為あり」

だ。これはゲーテが、ヨハネ伝の最初の句を「最初にロゴスがあった」ではなくて、「最初に行為あり」と『ファウスト』の中で書いたのは本当に素晴らしい。あの「ロゴス」という言葉は本当はただ「言^{ことば}」では訳が弱い。もつと内容のある言葉です。だから、「行為」と訳したのは大したことだ。

まず現実に行つてから、ものを言う。ものを言つてから行うのではない。行いに裏付けられない言葉というものは空しいというわけです。言わないでただ黙つて行為しているひとがある。それが一番本当なんです。即ち、行為そのものが言葉なんです。昔の偉大な坊さんたち、最澄、空海、法然、親鸞なんていうのはそういう深い行為的な実存的なひとたちでした。だから、妙な註解書なんかを読むよりも、ああいう偉大な人物の伝記を読んだほうが、逆に聖書の註解になる。

●魂の教育

私の小学校時代の校長先生に佐々木吉三郎というひとがいた。その先生の話は内容的にはもちろん覚えていませんが、私は小学校の生徒でしたけれども、非常に感銘した。月曜の朝の講堂修身が一番私は楽しかった。感激して聴いていた。ああいう校長さんが今はいるかね。

ビスマルクが、

「君は何に一番感謝するか」

と聞かれたら、

「小学校の先生だ」

と答えたという。やはり、小学校の先生方が魂の教育をすると、その少年少女に与える印象というのはいつまでも消えない。そういうもんです。教育というものはやはり教育者自身の魂の在り方が一番大事ですね。本を読んでいろいろ研究してものを言つたって、そんなのはだめなんだ。

それと、5、6年生のときの担任の先生、芦田先生の印象がまた非常に深い。ちょっと禅的な方でした。今、学校の先生で、魂のそういった在り方の人がどれくらいいるかね。要するに、問題は人物なんだ。何を研究したかではない。その人物そのものが与えるところの印象が一番大事なんだ。



●よくやってきたな

キリストはそういう人物でした。

「我を見し者は父を見しなり」

という。大変なひとだ。「何も出来ない、何も言えない」というキリストがそう言った。

「我何事をもなし能わず。何も教えない。神さまの言葉を伝えているだけの
なしだ」

と。けれども、本当に神の中に、神の懐にあった。ヨハネ伝に書いてあるね、

「キリストは神のふところにいる」

と。神の懐にいた人だから、「我を見し者は父を見しなり」と言われた。無者が無限無量者なんです。本当の無者は無限無量者です。我々も本当に無者にされていると、そこにキリストという無限無量のものが入ってくる。だから、

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言えるわけです。皆さん一人ひとりがそういう存在なんです。それが本当のクリスチャンだ。「キリストを信じている」とか、「聖書をどれだけ読んだ」とか、そんなことではない。「救を与える義」、これがキリストの義なんです。

「神の義はキリストに現れた」

というのはそういうことです。現れたばかりではなくて、必ずキリストの義を与える。これは与える義だから。「信ずる」ではだめだよ、キリストの中に自分を投げ入れて、キリストと一如に、一つにならないと。これを一番キリストが喜びたもう、

「よくやってきたな」

と。我々はあるがままキリストの中に自分を投げ入れる。瞑想してごらんさい、凄い力がくるから。

アウグスティヌス(354～430年)という人は非常に瞑想の深いひとだった。彼は素晴らしい福音の証者であるから、彼は本当の瞑想家です。カトリックにもプロテスタントにも、どっちにも非常に尊敬される人です。大変な先輩だ。あれは四世紀のひとだな。

●信じていません

22 イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信ずる者に与えたもう神の義なり。

と。それが「律法の外に顕れた」キリストという義人の義の消息なんです。

「イエス・キリストを受けとることに由つて凡て受けとる人に与えたもう神の義である」

ということですよ。「信ずる」という言葉がどうも、ただ心の状態みたいにひびくような言葉なんで、私は「信ずる」という言葉があまり好きではない。「受けとる」ほうがいい。体受する、身体で受けとる。信ずるなんていうと、観念的になってしまう。



「キリストを信じていますか？」

なんて聞かれたら、

「私は信じていません。キリストと一つにされています」

と答えてやりなさい。

「信じていませんよ、私はキリストと一つですよ」

と言うと、聞いている人がびつくりしてしまう。あなた方はそう言つて一向差し支えない。

²⁴ ^{いさお} 功なくして神の恩恵^{めぐみ}により、キリスト・イエスにある贖罪^{あがない}によりて義とせらるるなり。

「キリスト・イエスにある贖罪」という、この「に在る」が大事なんです。キリストは私たちの自我という罪を全部引き受けて、棒引きにしてみました。そして、神の聖意を中心としているところの義が与えられる。いいですか、義というのはそういった深い内容の言葉ですから、間違えないように。

● 渾然として

「アブラハムは信仰によつて義とされた」

とパウロが言ったら、ヤコブは、

「アブラハムは行為によつて義とされた」

と言った。ヤコブ書にそう書いてある。あれはおもしろいね。そうすると、

「ヤコブ書というのはおかしい」

なんて普通は思う。ところが、「信仰によつて義とされる」ということと「行為によつて義とされる」ということは同じことなんです。

「我らの父アブラハムはその子イサクを祭壇に献げしとき、行為^{おこない}によりて義とせられたるに非ずや。なんじ見るべし、その信仰、行為と共にはたらき、行為によりて全うせられたるを。」(ヤコブ2・21～22)

「アブラハムは行為によつて義とされた」とある。そうすると、

「ヤコブ書はどうも信仰をいい加減にしている」

なんて思うけれども、冗談じゃない。

「行為がなければ信仰もいい加減で、だめだ。信仰と行為は実は離すことができないんだ」

ということです。私が育った無教会では、「信仰、信仰」とばかり言つて、

「行為なんか問題にしたらだめだ」

と散々聞かされた。聖書の世界は、そんな分析しているような世界ではないんだ、渾然としている。



●神主義

「傍若無人」(傍ら人無きがごとし)という言葉があるね、ところが、今の日本人は大体傍若無神、(傍ら神無きがごとし)だ。西郷南洲が「敬天愛人」と言いました。その敬天がないんだ、今の民主主義は。だめだよ。私はあの民主主義という言葉は嫌いだね。神主義なら大丈夫だ。神さまが主になっていなければだめだ、民主じゃないんだ。縦のその関係が立たないで横の関係が全うされるわけがない。

我々の在り方というものは、何か打ち込むときは捨身の態勢です。

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もある」

なんていう言葉があるが、

「そのうちに浮かぶから捨てよう」

なんてのはだめだよ。身を捨てたら知らないまに浮かんだということ。ああいう言葉を逆にとつたら、功利主義になってしまう。そうすると、浮かばない。本当に生きた人というのはみんな捨身だね、実業家であろうと詩人であろうと。

「いつ仆れても、アーメン、ハレルヤ!」

という未完成交響楽です。地上で完成なんかしたらだめだよ。地上の生涯は未完成が本当なんだ。

●讃美歌的存在

シューベルトはいいことを言つたよ、「未完成交響楽」(ウンフォレンデット・ジシンフォニー)と。シューベルトはいいね。ベートーヴェンはつかいけれども、あのシューベルトというのは非常に、いい意味おけるロマンティストだから。

私はもつと音楽を勉強すればよかったと思う。小さい時から歌は好きだった。自分で好きな歌を口ずさんでいると、いい気持ちになるね。いずれ、復活節のときには少し歌ってみようかな。あなた方もいろいろ歌ってくださいよ。讃美ということは非常にいいことです。我々の生涯そのものが、生き方そのものが神讃美です。だから、讃美歌というものはいいものだね。

「あなたは何ですか」

と聞かれたら、

「私は讃美歌です。讃美歌的存在です。いわゆる概念で分析なんかできませんよ」と答えたらしい。

●聖霊を与えんがための贖罪

23 凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、
24 功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり。



ありがたいね、キリストの十字架の贖罪は。過去・現在・未来の私は全部贖^{あがな}われてしまっている。もう、平伏して「ありがたいございます」のほかに言いようがない。これがキリストの贖いということ。そうすると、今度はそこに、上から力がくる。贖いを本当に受けると、必ず聖霊がやってくる。聖霊を与えんがための土台がキリストの贖罪ですからね、贖罪だけではしょうがないんだ。

「祈って待つてろ、御霊がくだるから。火の如きものがやってくるぞ。我は火を投^{きた}ぜんために来^{きた}れり」

とキリストは言われた。「火」とは聖霊のことだ。ルカ伝12章49節、50節のキリストの言葉は大事なところですよ。

「我は火を地に投^{きた}ぜんとて来^{きた}れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望^{きた}まん」

「聖霊が本当に燃えたらもう望むものはないんだ」と。

「されど我には受くべきバプテスマあり」
十字架のことです。

「火を投^{きた}ずるために来たけれども、その前に受くべきバプテスマがある。贖罪をしてから、それからお前たちに聖霊を与えるぞ」

ということですよ。

「その成し遂げらるるまでは思い逼^{せま}ること如何許^{いかばかり}ぞや。われ地に平和を与えんために来^{きた}ると思うか」

「そうじゃない」と。

「われ汝らに告ぐ、然らず、反って分争なり」

「福音の世界は、これを受けとるか受けとらないかの、人々の分かれ目の世界だ。争いが起こる。仕方がない。けれども、福音を受けとった者は必ず勝つ」

と。己と戦い、人と戦う。サタンと戦う。

サタンはキリストにはかなわない。荒野でキリストは試みられたが、サタンは逃げて行ってしまった。まあ、大変なただね、イエス・キリストというのは。福音書を読んでいたら、皆さんは楽しくなる。福音書を読んでいて楽しくなかったら、本当は読んでいないのではない。「むずかしい」なんて、ちつとも難しくない。楽しい本だ。

●キリストを受けとる

24 功^{いさお}なくして神の恩恵^{めぐみ}により、キリスト・イエスにある贖罪^{あがな}によりて義とせらるるなり。

「贖罪によりて義とせらるるなり」とは「贖いによつて義を受けとった」ということ。



25 即ち神は忍耐をもて過ぎ来しかたの罪を見遁し給いしが、己の義を顕さんとて、キリストを立て、その血によりて信仰によれる宥^{なだめ}の供物となし給えり。えらい言い方をしてあるね。

26 これ今おのれの義を顕して、自ら義たらん為、またイエスを信ずる者を義とし給わん為なり。^{おこない} 27 然らば誇るところ何処にあるか、既に除かれたり、何の律法に由りてか、行為の律法か、然らず、信仰の律法に由りてなり。

「キリストを受けとる」、そういった律法に因つたのだと。

28 我らは思う、人の義とせらるるは、律法の行為によらず、信仰に由るなり。

それだから、本当にキリストを受けとる。これを、普通は、昔の私だつてそうなんだけれども、観念的に読んでいる。そして、こういう言葉が

「分かった、分からない」

なんてやっている。「分かった、分からない」ではない。

「本当に受けとっているか」

ということですよ。

29 神はただユダヤ人のみの神なるか、また異邦人の神ならずや、然り、また異邦人の神なり。^{かつれい} 30 神は唯一にして割礼ある者を信仰によりて義とし、割礼なき者をも信仰によりて義とし給えばなり。

全世界の神だと。問題は「キリストを受けとるかどうか」ということ。「割礼があるかないか」なんてことはどうでもいい。「割礼」というのはユダヤ人の儀式だよ。

● 天的必然性

31 然らば我ら信仰をもて律法を空しくするか、決して然らず、反つて律法を堅うするなり。

もう、超律法の世界だからね。「こうしろ、ああしろ。こうしてはいけない、ああしてはいけない」というのは道德の世界です。そんなことをとかく言っている世界ではないんだ。ヒルテイーが、

「本当の行為はせざるを得ない行為だ。選んで、こうする、ああするとやっているうちはだめだ」

と言った。「せざるを得ない」「イツヒ カン ニヒット アンデルス」(他のことはしようにも出来ない)、ざるを得ないというのが本当の世界です。これは西郷南洲も似たようなことを言っていた。雨が降れば、地は濡れざるを得ないでしょ。物理法則がそうだ。風が吹けば、木の葉は揺るがざるを得ない。これは必然性をもっている。自然の必然性が今度は、魂の世界の必然性になる、天的必然性になる。「かくせざるを得ない」と。

勉強せざるを得ない。「勉強しろ」ではない。



「私は勉強しないではいられません。勉強が楽しいんです」と、そういう生徒は本当の勉強をする。

「先生が言うから、仕方がないから勉強する」

ではだめなんだ。普通はそうだね。

「先生があまり厳しく言うから、少し勉強しなければ」なんて。

「勉強するのが楽しい、本を読むのが楽しい、書くのが楽しい」

と、何でも楽しくならなければ。だから、樂園なんだよ、本当の福音の世界は。地上が既に樂園なんだ、天国なんだ。

「天国は汝らのうちにあり」

とキリストが言われたのはそのことなんだ。

「私を受けとれば、キリストという天国体が入ってくるから、汝らは天国である」ということです。

● 耶蘇教なんか

私は高等師範の付属小学の二部にいた。一部、二部、三部とあって、一部は男子ばかりで、二部は男子と女子の合併のクラスだった。私はその二部にいた。しかも、一つの教室に5年生と6年生が24人づつ一緒にいる。1学年が男子12人、女子12人で計24人。それが2学年で48人。それが同じ教室で、一人の先生が1時間、あっちに行ったりこっちに行ったりして教えている。そして、ちゃんと6年間の教科内容は半分だけの時間でもって全部やってしまう。そういう授業は、あなた方は聞いたことはないでしょうね。そうやって、私たちは6年間やったんだよ。1・2年、3・4年、5・6年と同じ教室で、一人の先生があっち行ったりこっち行ったりして教えてしまう。あれは巧みなものだったね。ベテランの先生たちだ。それでも楽しかったよ。

私は小さいから最前列にいた。一遍、先生が6年生の方へ行っているときに、私は5年のときに、少しいたずら書きしていたら、そこに先生がやってきて、

「なんだ、これは」

とおこられてしまった。そういう想い出もある。

「ちよつと、小池は残っている」

なんて。茶目小僧だったからね、私は。けども、成績は悪くなかったよ。

私の一番上の兄貴は秀才でしたから、一部に行つて、必ずトップだった。

「君の兄さんはものすごく出来る人だから、お前はもつと勉強しなければだめだ」

なんて、叱られちゃった。まあ、いろいろな想い出があるよ、小学校のことはよく覚えているね。習字の時間のことも覚えているし。なにしろ、私はいたずらっ子で申し訳けな



った。1年から4年までは勉強なんかほとんどしない。5・6年だね、勉強したのは。中学校に入るにはやはり勉強しておかなければだめだからね。

私の一番上の兄貴、小池政美は旧制一高の文科でもって、「英語の代名詞」と^{あだな}綽名されるくらい英語がものすごく出来た。

「君の兄さんは素晴らしい秀才だが、お前はしっかり勉強しなければだめだ」なんてやられてしまった。

信仰の世界でも、あの兄貴がいたから、私は信仰の世界に入れた。貸家の二階で机をならべていました。兄貴は必ず毎晩、聖書を読んでいた。そして、日が暮れると、欄干のところに手を置いて祈っていました。私には宗教のことは何も言いません。彼の在り方が自ずから私に

「聖書というのはどんなものだろうか」

と思わせた。そのころは「^{ヤソ}耶蘇教」なんて言っていたからね、

「ヤソ教なんか受けとらない」

なんて思っていたんだ。ところが、ヤソ教になってしまった。ヤソ教なんていう言葉は、あなた方は聞いたことはないかね。イエスのことを^{ヤソ}耶蘇と言った。

●キリストの義を与える

²⁸我らと思う、人の義とせらるるは、律法の行為によらず、信仰に由るなり。

こう書いてあると、さあ「信仰、信仰」と言って、

「君の信仰は、私の信仰は」

なんて、信仰を今度は問題にしている。私は

「信仰なんかありません」

と言う。信仰なんてものは私したら、信仰でなくなる。キリストとの交わりの世界だから。そんなことをはつきり言う牧師さんはいるかね。

²⁹神はただユダヤ人のみの神なるか、また異邦人の神ならずや、然り、また

異邦人の神なり。

神は全世界の神だと。

³⁰神は唯一にして割礼ある者を信仰によりて義とし、割礼なき者をも信仰に

よりて義とし給えばなり。

「本当に受けとればキリストの義を与える」ということです。「義とする」という言い方はどうも観念になってしまう。「義を与える」と言った方がいい。それが「救の義」なんです。ラテン語で「ユステイティア・サル・ティフェーラ」(救を与える義)という。

³¹然らば我ら信仰をもて律法を空しくするか、決して然らず、反って律法を堅うするなり。



「反って律法を堅うするなり」とは――「堅うするなり」という言い方はあまり感心しないね――

「律法にしばらくしないで、律法を自然に行ずることになってしまふ」

ということ。普通の在り方をしていれば、ちゃんとそれで律法を全うしていることになってしまふ。それが第二の天的な自然性です。天的な自然性になれば、これは本ものだね。「こうしようか、ああしようか」ではない。

「かくせざるを得ない」

というのが本当の在り方です。これはヒルティの『眠られぬ夜のために』という本にもでている。

●自分と別れを告げる

「信ずる」という英語の「ビリーブ」という言葉は、

「自分と別れを告げる、自分を残して行つてしまふ」

という根底の意味をもっている。これはいつか私は内村先生のもものを読んで覚えている。「リーブ」というのは「残す」という意味で、「ビリーブ」とは、

「古い自分をそこへ残して進んでいく」

という意味をもっている。

「我々は信仰に逆らつて信ずる、

それはちょうど我々が望みに逆らつて望むが如し。」

We can believe against believe,

As we hope against hope.

これは、

「自分のビリーブではない。自分のホープではない」

という意味だね。それが本当のビリーブであり、本当のホープだと。

聖書はおもしろいよな。聖書は楽しいです。聖書くらい楽しい本はない。力がくるから、生命がくるから、光がくるから。聖書をもったいぶつてしまつたらだめだよな。さすがはルターは、

「聖書は真理のかけらだ」

と言った。神様の真理なんていうものはそんな盛りきれるものではないんだと。

